〝テディ〟とティガー

原　浩志

一

息子の徹が肩口から背中を丸めて俯き加減に、クラス別に分けられた列の最後尾からとぼとぼと歩いてくる。

通っている高校の遅刻回数の記録を塗り変えた徹も、今日はさすがに時間すれすれには滑り込んだようだ。

悪びれた風もない徹の常習的な遅刻は、かなりの低血圧で朝が弱いせいもあったが、それよりも毎夜遅くまでテレビゲームに興じたり、バラエティー番組を見てくっくっくっと笑っていたりする昼夜逆転したような生活が大きく影響しているのだろう。

〝自分なんかはたまに遅れたりすると、教室へ入るとき気持ちが波立って少しばかり身の縮む思いをしたもんだが・・・〟と思いながら、概して線が細く見える徹に意外と図太い面もある気がして、却って安心させられたりもした。

殊更にとぼとぼと頼りな気に見えたのは、孝博自身の心の動きが重なったもので、徹は単にあまり楽しんでいないだけに過ぎないのかもしれない。

徹が通っていた市立高校の卒業式の日だった。

思い思いによそゆきの顔と見繕いをした母親たちが声を潜めがちに、そこここで言葉を交わしている。

ゆとりのありそうな落ち着いた家庭を背後に感じさせる雰囲気を堪えた夫婦連れの親を目にしたとき、自身もこのような形で世間にありたかったのではないかと思いが切実に迫ってくる。

周囲の様子を見るともなく見ているうち、スクリーンに映し出されている出来事のように現実感が希薄になっていき、不意に涙が溢れ出そうになった。

「お孫さんですか？　感激ですよね」

高校を卒業する子を持つ母親にしては若く見える女性がこちらを覗き込むようにして、大げさな共感の表情も露に内緒話でもするような声を掛けてくる。
「え？　いゃ、まあ」
素気ない受け応えをするのが精一杯で、そのためか彼女がそれ以上の関心を寄せてくることはなく、晴れやかな顔を演壇の方へ向けたので、煩わしさから逃れられほっとした。
ぞんざいな時間の使い方をしてきたとどのつまり、身動きの取れない粗末な晩年が残される羽目になってしまったという感情が止め途なく押し寄せ、背中をざわざわさわさわ、ざわざわさわさわと悪寒が伝い走り、同時に呼吸が止まるような思いに一瞬襲われる。
「本校で共に学んだことを折節に思い起こして・・・校歌にあるごとく誠実真摯に・・・社会に役立つ・・・」
紋切り型の挨拶が壇上から切れ切れに耳許を通り過ぎていく。
卒業を迎えたここにいる生徒たちに四十三年前の自身を重ね合わせて気分を引き立てようとしたが、何も想起されるものはなく、ただ取り戻しのつかない凍りついたような時間の重さに打ちのめされるだけだった。
消しゴムで消せるなら消したくなるようなその場凌ぎの歳月を重ねながら、自らを糊塗し正当化づけてきた身勝手さを突然に思い知らされて、ストンと暗渠に嵌った。
自分へのごまかしが効かなくなって足許に亀裂が走り、その裂け目から実世間とずれた異相の世界へどんどん落ち込んでいく。
都心部周辺で電車の中などから見かける川は、海の持つ豊かさやおおらかさに欠け、どこか侘しく淋しい。
その淋しい川で水死体になって浮かんでいる自分を、まだ覚めている意識が躰から離れて見下ろしているような冷え冷えとした気分だった。
ぞくぞくと胴震いがきて、居ても立ってもいられなくなる気持ちを膝に乗せた両手に力を入れて、何とか椅子に押さえつけた。
―――山ねむる山のふもとに海ねむるかなしく春の国を旅ゆく―――
合わぬ歯の根の奥で、いつの間にか牧水を唱えるように繰り返していた。そうしていれば心の空洞が埋められて、もっと深い奈落へ落ちずに済むかとでもいうように。

公式行事が終了して生徒たちの後から講堂を出ると、卒業生の殆んどが、校舎と校舎の谷間にある狭い中庭にぎっしりと集まっていた。
厚手のコートを着ていてもまだ寒い日なのに、二～三名の生徒が上半身裸になって二階をつなぐ渡り廊下から身を乗り出し、何か叫びかける。中庭に蝟集した男女の卒業生が笑い声を上げたり、手を打ち囃したりしながらこれに呼応する。
どうやら毎年、運動部員がリードして自分たちで自分たちを送り出す慣例の儀式のようなものらしい。
これが巣立っていく生徒たちの本当の意味での卒業式なんだろうなと思った。
その場の雰囲気に乗り切れないのか、半ば照れくさそうにはにかみながら、それでも大勢の中の尻尾に加わるように笑みを浮かべている徹の姿を見出して目で追っているうち、少しばかり気が休まった。

「どうだった？」
「あんなもんじゃないかな。式次第中に騒ぎ出す生徒もいなかったし、まあまあ極く当たり前のおとなしい卒業式だった」
「徹くんは？」
「まあ、いつもの通り」
「そう」
「何かしら感慨があるんだか、ないんだか、曖昧な感じで」
「今の子は・・・、みんな・・・大体そんな風よ」
「式が終わってからね、生徒たちが中庭みたいな所に集まって、ちょっとばかり賑やかに騒いで別れを惜しんでいた。その中に徹の姿を見つけたのを潮に学校を出たんだ。真っ直ぐに仕事先に向かって帰りに寄る積もりだったんだけど・・・」
相部屋の人に気兼ねしながら声を落としてそこまで言うと、また激しい自責の念が込み上げ、切ない思いが堰を切ったように溢れ出し、嗚咽してしまいそうになるのをこら
堪えて顔をそむけた。
「少しの間、ここに居させてもらっていいかな？」
哀しみの影をチラと表情に走らせたように見えた朋江は一瞬目を閉じ、ベッドの上

で微笑むかのように口元を緩め小さく頷いた。
そのかげりと微笑みの中に、彼女のここ数年の歳月の重みを確実に感じ取ることができた。
五年前に乳癌の手術を受けて退院した朋江は、抗癌剤の副作用で髪の毛がすっかり抜け落ちたり、嘔吐感に苦しんだりした時期を乗り超えた後、まずまず安定していたと言っていい日々を送ることができるようになった。たまには住んでいるマンションの知人に誘われて、近くの公園にあるコートでテニスを楽しんだりするようになるまで回復した。
もう大丈夫かと思っていた矢先、前年の暮れも近い定期健診日に肝臓への転移が見つかった。
朋江はそのことを知ったとき、うろたえも取り乱しもせず、事実を呆気ない程静かに受け止めた。正月が明けてから精密検査のための軽い手術を受けた後、二月中旬に肝臓の右葉半分と胆のうに加え、卵巣を切除し、右胸の下辺りに抗癌剤を継続して直接注入するためのチューブを残す五時間を超える手術をしてから、まだ二十日程しか経過していない。
手術を終えて出てきた主治医は、どこか楽し気に見受けられる晴れ晴れとした表情を見せながら、「無事終わりました。成功です」と言った後で、「しかし、肝臓の癌は再転移しやすいから」と軽やかに付け加えた。
熱心で使命感すら垣間見える感じの良い医師だったが、〝神の手か？　やはり有能な外科医らしく切るのが好きなんだな〟といささか鼻白む思いがしたものだ。
朋江がその主治医に〝好意〟と言ってもいい信頼を寄せていたとはいえ、手術前の不安や術後の痛み、薬の副作用による不快感で眠れない日々を、時に鎮痛剤や催眠剤の助けを借りたとしても、どうやって耐え忍んだのか、歯科医の治療でも全身が固まってしまうように脆弱な気質の孝博には想像も及ばない。
一日に一度は少しの時間でも病室を見舞うようにしていたが、そんな折は「毎日、来てくれなくても大丈夫よ。食事とかいろいろ大変でしょ。ごめんね」と、却って気遣いをみせてくれた。
大きな手術を凌いだ後の静かで落ち着いた雰囲気を身の回りに漂わせている白っぽくなった顔を見ながら、自分なら恐れや不安、あるいは苦痛を訴えて不機嫌になるば

かりで、とてもこうはいくまいと、連れ合いとはいえ、畏敬に近い感情を抱いていた。
しかし、そうした朋江のベッドサイドにも十分間とじっとしていられない。粟立つ感覚にせかされるように、病室を出て新聞や雑誌の置かれた長椅子に四～五分腰掛けたかと思うと、また朋江の傍らに少しの間戻るという具合に、落ち着かず往き来を繰り返した挙句、二時間余りも病院を離れることができなかった。
どこか根源的なところから揺さぶられる存在することへの不安。それが悪感となって身と心を騒がしていた。
存在することへの不安は生き続けることへの不安へ直につながっていく。
病室を一歩出てしまえば、寄辺として縋るものがなくなってしまい、我が身を処し切れなくなるのではないかという強迫観念に捉われ、いつまでもぐずぐずしていた。
ここには、朋江のほかにも痛みや不安に面と向かわざると得なくなった人が大勢いる。点滴を引き摺って頼りなげに歩いている人や、狭いロビーを行き交う医師、看護士、見舞客などに思わず真摯な気持ちを籠めた目指しを向けて会釈しながら、乱暴な言い方になるかもしれないが、一種の仲間意識のようなものを覚え、自分だけが切ない思いをしているわけではないと一々内心で確認している。こうして世間から隔離された場所に身を置いていることで、点滴が少しずつ効いてくるように精神も何とかバランスを保てているようだ。
一人で世の中を泳ぎ切っていく甲斐性も持ち合わせていないという自覚もないままに、三十歳を境に八年勤めた大きな会社組織を離れて始めた小さな広告企画会社は、十年程前に立ち行かなくなった。以来、家族へ経済的に随分と不充足な思いをさせ、生活にも追われるような境遇に身を置く者としては、どこかで踏ん切りをつけて世間へ向け今日の一歩をとりあえず踏み出さなければという思いに一方で急き立てられる。若いときのように、すべてを逆転する奇跡が実際に起こり得るのではないかというような淡い期待に夢をかけることはできないのだから。
朋江の医療費や徹の大学の入学金、それに加えて丹沢山中の半原で一人暮らしをしている老父をもう少し近くに呼び寄せなければならない件など、差し迫った現実が頭の中で濁った渦を巻いている。それらに思いを巡らせると再び深く落ち込みそうになったが、心の中で〝えぇい〟と力なく掛け声をかけて、「何かしておくことはない？果物と牛乳パックを冷蔵庫へね。うん、分かった。廊下の右突き当たりだったけ。そ

れじゃ、その侭仕事に向かうから」と、毛布の上から軽く朋江の肩に触れる。「気をつけて」という囁くような声を背中に受けて、薄い繭で包み込まれるように微かな癒しを与えてくれた病院を後髪ひかれる思いで離れた。和むという言葉の実相が分かりかけてきたときは、そこから遥か遠くへわざわざ離れてきてしまったことを思い知らされ、気分も足取りもよろよろと最寄り駅に向かった。

二

夕闇の中を家へ帰ろうとしていた。初めは九段下から西船橋方面へといつもの経路を辿っていたはずだが、いつの間にか不案内な場所に出ている。随分前に、二、三度来たことのある日暮里駅周辺のようにも思える。

〝どうして、こんな所にいるのだろうか？〟と思いながら、足を早めるうち辺りは全く見も知らぬ光景に包まれていく。

階段の下に駅のようなものが見えたので下りていくと、下へ下へと曲がりながらいくらでも伸び続け、駅を見失う。

階段の途中にある踊り場に老婆が背中を向けて坐っていたり、どういう按配になっているのか、階段に貼り付いたように居酒屋があって、その中の人影が見え隠れするのだが、小児のときに迷子になったような不安感に襲われ、恐怖が募ってきて声が掛けられない。

迷路から抜け出せなくなるという焦りに、どんどん下っていく感覚が加わって耐え難くなったとき、目が覚めた。

まだ、夢の恐怖に揺さぶられながら目を開けた途端に、床が抜けてズルズルと躰が滑り落ちていく。夢うつつといった状態ではなく、はっきりと目覚めているという認識があり、どんどん遠くなっていく天井を見上げながら、今日は東京ビッグサイトで開催されている催しへ是が非でも行かなければならない日だと、懸命に自分へ言い聞かせる。

奈落の底へ吸い込まれそうになる直前に、思い切り腕を横に伸ばすと畳に触れ、身を捩って脇へ転がり逃れ、やっと起き上がることができた。しばらくは目が回り、鈍い疲れが滲み出る。

ビックサイトのフェアは仕事の一環として、年に幾度か取材に足を運んで慣れている筈だが、この日は入り口周辺に溢れ返っているビジネスマンの群を見た途端に眩暈

に襲われ、その場にしゃがみ込んでしまった。
彼らは、何か確固とした目的意識のようなもの、あるいは意思的なものを躰から放射しており、実世間が漲るエネルギーを凝縮させて、顔を覗かせたような雰囲気に気圧されたまま小半時も動くことができず、それからやっと鎖につながれたように重い足を引き摺って何とか仕事をこなす。
夜、疲れ切った躰をほぐそうと食後に湯呑みで焼酎をいっぱい流し込み、蒲団に入ったが寝つけず、結局起き出して隣室の小さな仕事部屋のスタンドの明かりをつける。
少し前から本が全く読めなくなっている。
ぼんやりと浮かび上がった本棚に夏目漱石、吉行淳之介、山口瞳、開高健、色川武大、藤沢周平などが白々しく背中を向けている。
永井龍男の短編なら拾い読みできるかとも思って手を伸ばしたが、どうしても活字を追えない。それらの本は今までは充足した時間を提供してくれたばかりか、時として護符のような役割を果たしてきたというのに。
映画やテレビ、ビデオなどの映像の類へは、既にはっきりとした拒否感が生まれていた。
椅子に坐って仕事机に突っ伏したり、檻の中の動物のように狭い部屋をせわしく歩いてみたりしながら明かす夜は、頭の中があちこちへ散らばっていくばかりで切なくひたすら長い。
早朝、冷たい水で顔を洗い、面倒な気分を引き立てて普段より伸びたように見える髭に剃刀をあてたとき、刃先が実物より大きくなって鋭く誘い込むように迫ってきた。急いで意識的に目を引き剥がす。
とにかく、仕事だけはこなしていかなければならない。
電車を待っていると、極端にスカート丈が短い女子中学生と思われる二人が、「おまえさ、昨日エッチした?」と朝の挨拶代わりでもあるかのように軽い調子で言葉を交わしている。
車内は扇情的な記事タイトルや写真を載せたどぎつい色の中吊り広告で溢れている。女子中学生にも中吊り広告にも、目をそむけたくなるような嫌悪感が湧いてきた。今までは日常的な光景として受け止め、いくばくかの関心を抱くこともなくはなかったのに。

仕事先の一駅手前で降り、タウンページで神経科医院を調べてカウンセリングを受け、渡された薬を飲んでからなんとか打ち合わせを済ませた。無理を言って小さな会議室を借り、先日の取材リポートのまとめを試みる。家では、とてもそんなことをする気力は湧いてこないことが分かっていたからだ。

確信犯的なアナログ人間を通してきたので、携帯を持ったこともパソコンを扱ったこともない。

余りに急速な技術の進歩は人間を必ずしも幸せにしないという、某氏のコラムを読んだときには我が意を得たりと手を打つ思いだったが、変化についていくのを億劫がっていただけではないのかと、今となっては確信を持てない。

原稿用紙の枡目を埋めていく作業に重い石を運ぶような難渋を強いられ、途中何度か躰のざわつきに見舞われながら、いつもの五倍程の時間をかけて何とか書き上げた。言葉が上滑りして空疎な内容に終始したのは、自ら受容するより仕方がない。

夕飯の支度をする気力もなく、出来合いの惣菜を買って帰り、徹と簡単に済ませる。

息子が自室に引き取った後、食器を洗うのもやっとのことで、仕事部屋の椅子に坐って両手の平を合わせて股の間に差し込み、いたたまれない時間を俯いて遣り過ごそうとするが、時間は重く鈍く停止したままだ。

「久し振り、澤木だけど」

電話が鳴って、懐かしさを呼び寄せる遠い過去からの声に耳の奥が感応した。

一週間程前に大学のクラス会が開かれ、欠席の返事を出していたことが頭に浮かぶ。

「十八名ばかり集まった。もう皆、還暦を超えるような年齢になってしまったし、亡くなった者が七、八名いるようだ。七、八名だってさ、少し多過ぎないかい。いつも、こういう時の世話役をやってくれた相田さんも昨年の秋に・・・。胃癌だったらしい。クラスただ一人のマドンナだったのにな。それで、分担して欠席者に連絡することになってね。君は僕が担当することになったんだ。永塚の強い勧めもあって。どう、元気？」

低いがよく響く声を聞いているうち、澤木とは学生時代に上辺だけでなく、精神の内面に触れるような付き合いもあったのではないか、というかすかな記憶が手繰り寄せられた。

他の同級生から電話があったとしても、必ずしも懐かしいと思う相手ばかりではな

かっただろう。特に現在の状況では。
「懐かしい声だな。今――、駄目なんだ。ひどい気落ちがしててね。うっかりすると、向こう側へ引っ張り込まれそうになってしまう。今日、思い切って心療内科の看板を出しているところに飛び込んでみたんだ。医師も医院もしっくりこないというか、余計にひどくなりそうな感じでね。2週間後に予約が組まれてるんだけど、気が重くていけるかどうか」
「そうか、ところで永塚から聞いたんだけど・・・。奥さんの方はどう？」
永塚は学生時代の友人の中では、絶えることなく時折連絡を寄越してくれ、孝博が数年前に小さな事務所を事実上倒産させたことも、それに伴う困窮振りも、連れ合いの病気のこともある程度知っていた。
〝お前は中途半端に優秀だったし、中途半端にまじめだったんだよ〟というのが、孝博の蹉跌に対する永塚の口癖だった。その言葉の裏には、お前にはもう少し期待していたが案外だったなという見込み違いに対する落胆と皮肉、それに何とかこれから踏ん張っていけよというニュアンスの両面が含まれていた。
出席した同級生の中には、大手商社の社長になった者をはじめ、金融機関やメーカー、百貨店の役員などになった者が少なからずいるようだったが、自分はなるべくしてこうならざるを得なかったのだと感じた。
努力や不屈の精神などという言葉の有りようとは別に、人間はある面では刷り込まれたＤＮＡから抜け切れないのかもしれない。今は、悔恨だらけの過去にできるだけ捉われないようにしながら、他者と比べることなく自分の足許だけを見つめていかなければならない時なのだろう。
連れ合いは二～三週間後には退院できそうだと澤木に伝え、自分自身は少し前からその場にじっとしていられないような焦燥感やら不安感に取り憑かれていると、急いで言い添えた口調が訴えるようになっていた。
「僕が電話することになって本当によかった。とにかくお互い時間を遣り繰りしてできるだけ早く会おう」
澤木は孝博の状態を即座に理解したようだった。澤木の父親は医師と聞いていたが、彼はその道へは進まなかったはずだ。今は大学の講師を掛け持ちしながら、東南アジアで断続的にボランティア活動を続けているという。

一週間後の午後三時半に鎌倉駅前で落ち合い、精神科のクリニックへ連れて行ってもらうことになった。鎌倉へ通院することになると、現在住んでいる千葉市からは時間と交通費がかなり負担になるが、孝博自身が横浜に住んでいた子供の頃からずっと鎌倉周辺の土地柄が好きだったこともあり、申し出を受けることにした。少し早めに出て疲れない程度に鎌倉を歩き、三時半前には駅へ向かおうと思った。そうすれば、気分が少しは変わるかもしれないとも。

電話をくれた翌々日には、ファイリングケースにきちんと整理されたクラス会の写真が届けられたが、追憶に鼻をくすぐられるよりも、あっという間の歳月の経過に呆然とする思いが先に立った。

時間というものは非情だ。

将来を見据えた歩みを持続して積み重ねてこなかったばかりか、現実に正面から向き合うこともせず、自分をごまかしながら日々をただうっちゃるように生きてしまったという慙愧の思いが、スナップから炙り出される。

澤木はそれから約束の日まで毎夜のように控えめな電話を掛けてくれ、孝博の背中に貼りついた無数の小さな蟹がざわざわと蠢くような悪感を静かに受けとめてくれたので、ひと時救われる思いがした。

三

鎌倉に早めに着き、十年程前までは慣れ親しんできた寺か海へ出る積りだったが、東口のバスロータリー前に立つと急に気持ちが萎んで億劫になり、また、寺や海を目の前にすることにどこか恐怖に近い感覚も芽生えてきたので、小町通りの街並みや路地、段葛の道を端から端まで歩いてみた。しかし、期待していたように気が晴れることもなく、かつてこの街を楽しく歩いた日々を心の片隅から掘り起こしてみても、却って侘しい思いが募るばかりで、そのうちいつもの悪感が走ってきた。急いで古くからある喫茶室「門」へ入り、ミルクティーを飲んで躰の中から温めながら時間を遣り過ごす。

約束の時間より五分早く駅改札口前へ行くと、ソフト帽を被り黒い厚手のコートを着た上背のある澤木が既に待っており、軽く右手を上げた。

紛れもなく学生時代の澤木そのものだったが、歩み寄っていくと一瞬のうちに三十三万時間が流れ、目の前にいたのは学者風の落ち着いた雰囲気を漂わせた初老の紳士

だった。
帽子の後ろから覗く長髪がなかなか様になっている。
「早くから来てた？」
「うん、一時間程前に。少し歩いてみた」
「それで？」
「心が浮き立つとはいかないまでも、好きな場所へ久し振りに来たわけだから少しは・・・と思って降り立ったんだけど、何だか却ってみじめな思いがするばかりで」
「寒くもあるしね、今日は。とにかく、まずクリニックへ」
そう言って澤木は先に立ち、小町通りを少し入ったところを左に折れた医院のドアを開けた。
待合室が熟れたような雰囲気を帯びるのはこうした精神科に共通しているようだが、カウンセリングや診察を待つ人で溢れ返る院内は、患者の混沌を分散させるかのように小ざっぱりと清潔だった。順番待ちとカウンセリング、医師による診察と合わせて一時間半程の時間を、澤木は受付前に置かれた椅子に腰掛けて待っていてくれた。こういう言い方は少しばかりおかしいが、ほぼ同年輩に見える医師とも波調が合った。
院外薬局で薬を受け取った後、蕎麦屋にでも入ろうかということになり、小さなビルの地下にある店へ下りていく。
「まあ、とりあえず暫くでした。この前のクラス会の報告を後で少し・・・。酒、頼む？」
「いや、今はビールだけなんだ。たまに呑んでも焼酎を少しくらい」
「それじゃ、僕と同じだ。〝お嬢さん、ビール持ってきて。〟後は簡単な肴と上がりに蕎麦を食べよう」
あまり遅くならない方がいいだろうし、と澤木は付け加えた。
「堀田も軽部も出てきたんだ、クラス会。あぁ、それから西井も。皆、それなりにいい年輩になっていた。堀田がやけに老けた感じになっちゃってね」
ビールが運ばれ、グラスを合わせながら澤木が送ってくれた写真の一人一人を想い浮かべていた。
すっかり貫禄がついて重厚なエクゼクティブ風になった者や、かつての軽薄さをそのまま残して年齢だけ積み重ねたような者など、とりどりの顔が並んでいたが、記憶

からすっぽり抜け落ちてしまった者も少なからずいた。
「僕は学生時代、殆どドロップアウトしていたし、その後誰とも会う機会がなかったもんだから、失われた時間を取り戻しに行ったようなもんさ。最後まで誰だか分からないのもいたしね。今日の方が余程クラス会みたいな気分だ。ともかく僕が連絡係になってよかった。実は似たような症状に長い間苦しめられてね、僕も。何かお役に立てるかもしれない。さっきのクリニックは僕が通っていたところなんだ。患者に合わせた薬の処方もうまいし、いい医者だと思う」
澤木の低くよく通る声は、モデラート・カンタービレの曲を聞くような心地よい響きがあった。
「あぁ、それから忘れないうちに。押しつけがましくなるかもしれないけど、これ、持って帰ってほしいんだ」と言って鞄を開け、一冊の文庫本とCD一枚を手渡して寄越した。
文庫本は上田三四二「この世　この生」とあり、未知の作家だった。
「CDはジャズ。ピアノとヴァイブラフォーンの音色が今の君に合うんじゃないかと思って選んできた」
澤木がビブラフォンではなく、ヴァイブラフォーンと発声するのを聞きながら、好意が身に滲みた。
学生の頃、澤木とは感覚の微妙なニュアンスで通じ合うところがあったように思う。
当時、澤木は殆ど授業に顔を見せなかったが、その時間はジャズ喫茶に入り浸っていたようだ。
「新宿の街を歩いていたとき、一軒の店から流れてくる音楽に耳が立ち、〝これはなんだ？〟と思って入ったのが病み付きになってしまったってわけ」
それから都内や横浜のあちこちの店に出入りし、六時間もねばって聞き続けたことも少なくなかったそうだ。
〝そうか、あの頃はジャズにのめり込んでいたのか〟と思いながら、比較的にマメに授業に出ていた自分を思った。特別に授業が面白かったわけでも、何か目標があったわけでもない。没個性の小心翼々たる優等生根性から抜け切れなかっただけだ。一人の時間は、ひたすら通学の沿線にある街をほっつき歩き、たまに、これはという映画を上映している小屋に出くわすとそこへ入った。今なら「街歩きの達人」といったよ

うなジャンルの雑誌もあるが、そんな気の利いたものではなく、ただ、目標が見出せない不充足と屈託を抱えて歩き回っていたに過ぎない。

その頃、孝博は吉行淳之介に熱心だったが、澤木は森有正を読んでいたという。

澤木の言うことは、すべておぼろ気ながら知っているようでもあり、この日初めて耳にするようでもある。記憶というものは実際、不確かなものだと思う一方で、自分が迂闊な時間の過ごし方をしてきたため、何もかも曖昧になっているのではないかという不安に襲われ、寒々しさがよぎった。

本来なら時間を忘れて懐かしく愉快に過ごせるはずのところを、澤木といる間も、身の内から時折ざわざわさわさわと不快な波が押し寄せて落ち着かなかった。

きれいにテーブルに並べられた肴に箸もつけられず、何とか蕎麦だけを食べ終え、早速食後の薬を飲んだところで澤木に不調を告げ、早めに切り上げさせてもらうことにした。

「あっという間に、時間がたったね。君はここからだとかなり時間がかかるし、そうした方がいい。とにかく、これからだ。二人のクラス会を何度か持とう。僕もさっき言ったように、自分が存在していることの不安に耐えられない時期があってね。もちろん、希望的な想像力なんか全く持てなくなって、虚無の淵に長い間沈みこんでしまったんだ。周りから指摘されても、今だに思い出せない月日もある。五十歳代の社会人としては一番いい時期を十年近く棒に振ってしまったようなもんさ。夜九時には大体家に戻ってるから、いつ電話してもらっても構わない」

澤木の柔らかな受容は、彼が同じような苦しみを乗り超えてきたことを十分に想像させ、自分一人ではないという思いが、気持ちをいくらか慰めてくれた。

外へ出ると鎌倉散策に来ていた溢れるような人たちの姿もめっきり少なくなって、店舗のネオンが闇を深くし、一際寒々しく荒涼としていた。

大船で澤木が降りた後、家までの長い時間につきまとうであろう底なしの孤独感に耐えられるだろうかと、心細さが側々と身に迫る。

かろうじて引き摺っていた尊厳や誇りは身に付かない繕いに過ぎなかったようで、どこかに霧散してしまい、意志の外にある自律した神経が勝手に動き出し、それに苦しめられる。

四

澤木が下車した後、ざわつきから逃れようと「この世　この生」の頁を開いた。
第一章、「花月西行」の初めの部分で、大患を得た上田三四二が自分に残された人生の時間を「死の瞬間における死」である滝口までの河の流れのようなものと想像している。なお、自分の生を滝口近い水流の一点に想定し、滝口までの線分の生をどう生きるかに思いをひそめればよいという内容の文章に出会った。
「滝口までの線分の生」という言葉が誂えたように身の内に収まる。
一行一行ゆっくりと読み進めるうち、生と死を見つめる静謐な文体は、時として死の諸相を覗かせてひんやりした感触を含みながら、深いところで和みに導く不思議な優しさと勁さが張りつめていた。
本の中に居どころを見つけて、ひと時ざわつきから逃れることができ、眠れない日が続いたのと僅かなビールの効きめもあってか、新川崎駅辺りで眠気を催してきたので、本は毎日少しづつ大切に読むことにして鞄へ仕舞い込んだ。
気がついたときは、〝よつかいどう〟という車内アナウンスが遠く微かに聞こえた。ぼんやりした頭は一瞬のうち事態を見失ったが、すっかり眠り込んで途中下車すべき津田沼駅を大分乗り越し、四街道駅まで来てしまったらしい。慌てて飛び降りた。
反対側のホームに回り込んで時刻表を確かめると、最終まで戻りを二本残すのみで、それも次の電車まで二十分程待たなければならない。
名前でしか知らない駅のベンチに腰掛けた途端、虚無の淵が口を開けて全身を搦め取ろうとする。
先程降りた向かいのホームがスポットライトを当てられたように明るくなり、突然降って湧いたかのように数名の男女が、てんでんばらばらに佇んでいるのが目に入る。
なかに一人、きちんとしたスーツにネクタイを締めた三十歳代のかなり大柄のサラリーマン風の男性が、ホームの一定区間を往き来しながら歌っている。
「おしっこするから待っててね」
「おしっこするから待っててね」
「おしっこするから待っててね」
「おしっこするから、おしっこするから、おしっこするから待っててね」
惚れ惚れするようなテノールで、時に大きく、時に小さく、緩急をつけて歌い上げる。他の男女は何事もないかのように、強いて気にする風もなく、その侭佇んでいる

人も、ホームを歩き始めた人もスローモーションのように波打って見える。
男はトイレに行く気配は微塵も見せず歌い続ける。
自分のいるホームの左右を見渡すと誰一人姿はなく、これからどこかへ帰ろうとしているのか一瞬分からなくなった。子供の頃住んでいた家や現在の住まいが朧げに頭の中で明滅している。

「うぐ、俺を呼び出すな。誰にも知られないように消えたんだから、うぐ」
祖母の弟の酔っぱ爺ちゃんが、いつものように酔っ払って現れた。
無縁仏になった酔っぱ爺ちゃんを祖母がいたこに呼び寄せてもらったのだ。
着物姿の小柄な祖母が、両手を胸の前にくるめて垣根を軽々と飛び越えていく。梅干しをくるんで三角形に折った竹の皮の端を吸いながら、驚くというより呆気にとられて見ている自分がいる。周辺は子供の頃住んでいた場所だと、ぼんやり分かる。
夜になった。蒲団を頭からすっぽり被って寝ている祖母に〝お婆ちゃん、大丈夫？〟と声を掛けてみる。
〝顔を見るな、決して顔を見るでない〟
祖母はきつい声でそう言いながら、蒲団の端を強く握って引き上げる。
〝お婆ちゃんは、狐になってしまったんだ〟と思い、悲しさが胸に溢れてきた。

「もしもし、お客さん！　かぜを引いちまうよ。終電車は出てしまいましたよ」
寒さで胴震いがした。いつの間にかベンチでまた寝込んでしまったらしい。
祖母が一度狐憑きみたいになったことがあるのを三、四歳の頃、見たような気がした。
あるいは、東北でいたこに会ってから、祖母も霊を呼び出せるようになったが、自分で解くことはできない。と親類の誰かが話していたのを聞いただけだったのかもしれない。
〝タクシー代が間に合うだろうか？　馬鹿馬鹿しいことになってしまった〟

現実に引き戻され、ひどい落ち込みに襲われて、幼児のように心細くなってきた。

五

食欲は殆どなく、日中は飯田橋のお堀端や街中の混んでいない小ぎれいなカフェで、調理パンなどを半分食べるのがやっとだった。

躰が宙に浮いたように頼りなく、過去は始末に終えない日々の積み重ねに過ぎないと思われ、自らを限りなく悔い責める渦巻きのような状態から抜け出せない。

また、睡眠剤が効き過ぎて翌日まで残るのか、信号を渡りしなにちょっとした段差へ足を引っ掛けて蛙のように転がり、手の甲やひざに軽いけがをしたりした。

みじめな思いに捉われがちだったが、孝博が澤木に連絡する気力を出せないだろうことや迷いを慮ってか、澤木の方から毎晩のように電話をくれた。

「どう？」という一言だけでも心強くなる。

預かったCDはチック・コリアとゲーリー・バートン共演のクリスタルサイレンス。丸い小さな水滴が薄いガラス板の上を跳ねるような透明感に溢れた美しい音の連なりと軽やかなリズムが、沈み込みがちになる気持ちを洗ってくれ、繰り返し繰り返し何度も聞いた。

併せて、「この世　この生」の凛とした文章を噛み締めるように読み進むうち、背中のざわつきは消えるわけではなかったが、症状は一進一退を繰り返しながら、いくらか軽い気分で過ごせるような日もたまに持てるようになってきた。

三月十九日は忘れられない。仕事で高田馬場へ向かったとき、学習院短大付近などの桜並木はまだ蕾なのに、駅傍らにある小学校の校庭の一本の大振りな桜だけが、早咲きなのかピンク色の大きな花で満開になっている。思いがけない美しさに息を呑む思いだった。しかし、三四二の「花月西行」で知り得た〝花にそむ心のいかで残りけむ捨てはててきと思うわが身に〟という歌に託された花への愛着が湧くよりも、何か特別な生命力を宿したこの世ならぬあやかしを見ているというような畏れに似た気持ちの方が強い。ただ、呆然と立ち竦んだ侭、暫く眺めていた。

その夜、朋江から明日には退院できるという電話が入り、澤木にも早速伝えると喜んでくれ、今後は電話を控えるから辛いときはいつでも孝博の方から掛けるようにと付け加えた。

朋江は暫くは家で寝たり起きたりの生活になるだろうが、まずひと安心という気持ちと、自分の症状をできるだけ取り繕って心配をかけないようにしなければ、という焦りが交錯した。

久し振りでテレビをつけると、イラクに対する米国の開戦が翌日に迫っていることを伝えており、孝博の切なさとはまた違った、人間の底無しの業のようなものを感じ、暗い気分に引き込まれる前に急いでスイッチを切った。

仕事の帰りにスーパーへ寄り、夕食の材料を仕込んで戻る途中、朋江が入院中は慌ただしく出来合いの惣菜を買いにいったことや、息子と一緒に自転車を走らせて出かけた回転寿司やファミレスの味気なさが、寒々とした想念となって幹線道路に浮かび上がる。

簡単な鍋ものと茄子を生姜で焼き、久し振りに家族三人で食卓を囲む。

得難い和やかな時間を噛み締める中、それと知らずに人の好意を裏切ったり、人の心を傷つけてきた身勝手さ、あるいは虚勢、見栄、思い込みなどで糊塗してきた人生が身に迫った。にも拘わらず、これまで自身を満更でもないと思い上がっていた時々が胸を掠めたとき、うどんが喉につかえた。

そして、今までずっと若い時からの延長線上にあると思っていた自分の生が、老境という未知の段階に分け入ったのを、この時初めて実感した。

抱え込んだ心の病いは、間違いなく老化を加速させるだろう。

ひと

他人と引き比べることなく、家族と自分の思いをささやかに満たし、できれば安穏で善良な日々を送りたいと心底から願ったとき、目の脇に涙が滲み出そうになり、咳払いを一つしながら鍋の湯気に紛らわす。

「父さん、今日は珍しく食欲があるみたいだね」

「うん、やはり二人きりで食べる牛丼やファミレスなんかとは違うよ」

「あれはあれで、結構面白い時間だったし、まあまあだったよ。吉野家の特盛とか松屋のカルビ定食なんかはなかなか」

家族で過ごすより、四畳半の自室でテレビゲームに興じたり、友達と遊んだりする方を選ぶようになっていた息子も第二だか第三志望の大学になんとか引っ掛かり、久し振りの三人揃った団欒が珍しいらしい。ほっそりと一回り細くなった朋江の顔をチ

ラッチラッと見ながら、少し浮かれた様子で照れながら混ぜ返す。
初めのうち、激戦を生き抜いて帰還した兵士が茫然としているような感じだった朋江も、父と息子との遣り取りに淡い色の花がつつましく開くような笑いを浮かべ、次第に安堵感に浸されていくのか少しばかり鍋に箸をつけた。
朋江が退院してから、澤木からの電話はぷっつり途絶えた。澤木がこちらからの電話を待っていていつでも受け入れてくれることは、まるで強い電磁波でも送られるかのように分かった。
しかし、調子の悪いときは公衆電話まで出る気力もないし、携帯も持っていないので、朋江に余計な心配を掛けないためには、じっと耐えるしかなかった。
何とか自分の落ち込んだ状態を気取られないように取り繕っていたが、脆弱な性格が炙り出されて虚ろに目が泳いだか、救いを求めるような顔つきになったのだろう。
朋江がそれを見逃すことはなかった。あるいは徹の卒業式の後、病院に見舞ったときから気づいていたのかもしれない。
「とてもつらそうだわ。病院で診てもらったら？　いろいろ重なったからノックダウンされてしまったのね。ごめんね。私は・・・自分の躰のことで精一杯だから・・・」と後の言葉を呑み込んだ。
朋江の方は週に一度、抗癌剤を注入してきた日を除いては、目に見えるように回復の兆しを見せているようだ。
ただ、夜は抗癌剤の副作用か、断続的にしか眠れない日や殆んど寝つけない日が続いているようだったが、医師から与えられていた睡眠剤には頼らず、音を絞り切ったテレビをつけ放しにしたまま、長い夜を遣り過ごしていた
間もなく炊事など日常の事はこなせるようになり、心底〝強いな〟と感じ入った。
朋江が乳癌の手術を受けて退院した五年程前から、部屋を別にして寝るようになっている。その折、朋江は「今夜からおしとねご免にさせていただきます」と、少し芝居がかった調子で唐突に宣言した。
切除せずに済んだ胸などを少しまさぐった後、勝手に寝ついてしまう孝博の寝相の悪さやいびきを幾夜か耐えた後、決めたのだろう。
その時は、愛想をつかされたのかといささか〝ムッ〟としたものだが、自分の方も調子が悪くなって寝つけなくなった今となってみると、そのうっとおしい思いがよく

理解できる。

朋江は今度退院してから、枕の脇に徹がＵＦＯキャッチャーで取ってきた熊のぬいぐるみを添い寝させている。まるで子供みたいだなと思いながら、自分が居るべき場所に陣取ったぬいぐるみを見ると、ボタンの目がなかなかつぶらで愛くるしい。いわゆるテディではないが、まあ、いいだろう、〝テディ〟と呼ぶことにした。

孝博もある日ふざけ半分に、徹の戦利品の中から熊のプーサンに登場する虎のキャラクター、ティガーを枕元へ置いてみた。極端に鼻が大きく、とぼけたような目で眠っているティガーを大の字に傍らに寝かせると、愛着が湧いてくるというか、習慣になるというか、毎晩そうせずには物足りない気分になってきた。幼児の頃、ぬいぐるみと一緒に寝た記憶はなかったが、その気持ちがよく分かった。うっかり手などを踏んでしまったときは〝ごめん、痛かったかい〟などと、心の中で語りかける始末だ。

五十三歳の妻の横にいる〝テディ〟と六十歳の夫の隣に寝るティガー。

他人から見れば噴飯ものだろうが、徹は〝ティガーが迷惑そうにしてるよ〟とからかっただけだった。

寝る前に処方された安定剤と睡眠剤を飲み、ティガーを横に蒲団に入ると、ぐっすり眠れるようになった。朝、蒲団をたたみ、傍の箪笥の上に寄りかけさせたティガーは相変わらずとぼけた目で眠り続ける。

六

薬が馴染んできたのか、一時（ひととき）より大分楽になってきた。たまに、自分から気息を整えるため、飯田橋駅近くの外堀沿いに板を掛け渡した上にあるカナル・カフェに足を向けることがある。

緑の堀水に波紋が広がると、潜水艦が海面に浮かび上がるように大きな黒い鯉の背びれが見える。水面を滑るように進む二～三羽の鴨。五百円のコーヒー代は今の孝博には少し痛いが、ほぼ確実に手に入れることができる、適度に静かな環境がもたらすしっくりと落ち着いた気分には代えられない。

時間が少しずついい方向へ運んでいってくれているのかもしれないと思ったとき、堀面に波紋が広がり、油を塗ったように黒くてかった大きな鯉が、すぐ目の前でピシャッと跳ねた。微かに風の匂いを感じ、記憶の底にある気分が一瞬だけ躰を通り抜け

た。

〝あぁ〟と小さく声に出してみる。

〝この一瞬は爽やかな感覚に近い〟

いたたまれない時間が溶けていく。

日常というものは個人の事情に関係なく、絶え間なく前へ進む。健全なときは、だからこそ大した屈託を抱え込まずに生きていかれるのだろう。

藤沢へ仕事に向かった。保土ヶ谷を過ぎた辺りで、車窓から淡いピンク色を咲かせた桜の木が美しい姿を惜しみなく見せては次々と過ぎ去っていく。発症してから一年余り経過していた。その間、時間は意地悪くしつこくたゆたっていたが、一年を振り返ってみると速くもあり、長くもあった。繰り返し読んできた上田三四二を鞄に収め、しばし車窓を走り抜ける風景に目を奪われる。空がカラッと青い。心の中の引き出しに仕舞い込むように、青空の下の桜の花を眺めては、時折、目を閉じると瞼の裏側にオレンジ色の光を感じる。

その恩寵のような光のイメージが翻って、この時間にもイラクでは砲弾が飛び交っていることを連想させた。戦闘の渦中へ舵を切り、無神経さを増々肥大化させていくように思える政府と、孝博自身も含めて流れに委せた侭痴呆現象化していく世間の流れ。ヤレ、ヤレと心が沈み始めたとき、また虚無に? まれることを恐れて、急いで花の連なりに目を向け直した。

藤沢での仕事を終え、江の電で鎌倉のクリニックへ向かう。沿線は今も高層ビルの姿などは見えず、昔の侭、木造の古い家や樹々が電車に触れそうな程近くに迫り、のどやかな印象を残している。

江の島駅から腰越駅へ至る間に江の島がチラッと全景を見せ、腰越駅を過ぎると鎌倉の海がパノラマのように車窓に広がる。診察時間まで余裕があるので、由比が浜で降りて海の匂いを吸い込んでいこうかと迷っているうち、七里ヶ浜を過ぎた辺りから、次第に海が離れて見えてきたので、すぐ億劫になり途中下車を断念した。

鎌倉のクリニックに三週間に一度通い始めてから、既に十数回を超える。その初めの三分の一程は心が閉ざされ、目は虚ろに泳ぎ、ただただ砂を噛むような時間だったが、今はこうして周辺の風景が目に入り心に留まるまでになった。

しかし、安心していると躰のどこかに潜んでいたごとく、ざわつきの微細胞があち

こちから一斉に蠢き出すこともまだ少なからずあり、本当に心が解き放たれるまでには至らない。

医師に話を聞いてもらいながら、バランバランになった頭の中のジグゾーパズルを埋めていくような自分探しは、これから長くかかるだろうと思った。

鎌倉駅にオール二階建ての湘南新宿ラインが滑り込む。家へ帰るには、千葉・成田方面行きに乗らなければならないのだが、横浜か品川辺りで乗り換えることにした。

二階のシートに腰を落ち着けると、夕暮れに合う時間がゆったりと流れていく。

今夜も朋江の隣には〝テディ〟が、孝博の傍らにはティガーが枕を並べるだろう。